

---

# 罰と赦し

LiN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
罰と赦し

【コード】  
N1979Z

【作者名】  
L i n

【あらすじ】  
罰するといふことは赦すといふこととで、赦すといふことは罰するといふことと

和美が帰った時、弘志は寝っ転がってテレビを見ていた。やっておくと約束した掃除はまったく手をつけていないまま。それで和美は怒った。

和美は普段から弘志に対しては割と感情的に接することがあったけれど、この日の怒りようは激しいもので、問い詰められて平気なふりをしながらも、弘志はたまに怯えた目で和美を見る。

「わかった。今から掃除して。」

和美は乾いた声で言う。

「ぜんぶ。隅まで。」

弘志は「わかった・・・」とつぶやく。

これ以上彼女を怒らせたくないようだった。

弘志がしゃがみこんで床をぞうきんで拭いている。

和美は弘志のお尻が拭く動作に合わせて動き、ショートパンツの裾から下着がちらちら見えるのを見てニヤニヤしながらスナック菓子をほおばった。

「お兄さんいいお尻してるねえ」

和美がからかうと弘志は抗議の目をキツとむける。

「なに〜？文句あるの？あ、そこまだ汚れてる」

弘志はムツとした表情になるが、黙って言われたところを拭くのだった。

和美はこうやって怒ることがあっても罰と称して弘志をいじめ、それですぐに機嫌を戻すのだった。

「ほらあ、気合いが足りない〜、いっちに！いっちに！」

「つちに・・・」

「声小さい！」

こうやっていじめていると、いつもなら弘志はもう許してほしいと乞うか、泣きだしてしまうこともあるのだが、今日は気丈にどうか、やけくそというのだろうか

「いつちに！いつちに！」と大きな声を出し、床を拭き続ける。

和美はこいつも少しは男らしくなってきたなと思いつつも、不満な気持ちは確実に生まれていた。

「ちよつとトイレ」

そんな中、弘志が言った言葉が和美のいじわる心に火をつけた。

「おしっこ？」

「うん」

「だめだよ」

弘志はトイレに行かせてもらえないまま掃除を続けた。

ごめんなさい、これから掃除はちゃんとしますと何度も謝ったけれど、和美は許してくれない。

我慢で苦しいと訴えても「漏らしちゃえば？」と和美は笑った。

ベッドの下にほこりが残っていると、弘志がちよつと涙ぐんだのがわかった。和美はそれで気分もよくなってきたけれど、もつとこの子が困る顔が見たいという欲望が勝った。

弘志はなんとか掃除を終えて、再度トイレに行かせてほしいと和美に願いでた。足はプルプル震えてすがらような視線を和美に向ける。「じゃあ、お掃除をさぼってごめんなさいって百回言って。心をこめてね。そしたらおトイレ行かせてあげる。」  
また、弘志の目に涙がたまるのが見えた。

「お掃除をさぼってごめんなさい。」

「お掃除をさぼってごめんなさい。」

「お掃除をさぼってごめんなさい。」

弘志の声が部屋にゆっくり響く。

少しでも早く言つと、和美からやり直しを命じられた。

弘志は気をつけの姿勢で部屋の真ん中に立たされている。

「お掃除をさぼってごめんなさい。」

「お掃除をさぼってごめんなさい。」

半分の50回を超えて少ししたぐらいで、

弘志の口が止まった。

足の震えは収まらない。

「どうしたの？」

「・・・」

「まだ終わってないよ？」

「もう・・・だめなんだってば・・・」

「なにが？」

「おしっ・・・」

「おしっこがどうしたの？」

「漏れちゃう・・・」

「百回。終わらないとおトイレ行けないよ？」

弘志は和美を睨む。

「ほら、続けないと。」

「おっ・・・おそつじをさぼっ・・・て・・・」

「おそつじをどうしたの？」

次の瞬間、「あー」弘志が悲しそうな声をあげた。

シューッと音がして弘志のショートパンツの前の部分にシミが広がったかと思うと、おしっこがあふれ出てきた。

おしっこは弘志の足を伝い、ビチャビチャと音をたてて床に落ちる。フローリングの床に次々と弘志のオシッコが流れ落ち、あっと言う間に水たまりを作ってしまった。

弘志の目から涙が一粒、ほほをつたって、足元の水たまりに落ちていった。

「まだ終わってないよ？」

和美が言くと、弘志は眼を見開く。涙が、もう一粒、落ちる。

「ごめんなさい・・・」

「おそうじをさぼってごめんなさい」

「おそうじをさぼってごめんなさい」

「おそうじをさぼってごめんなさい」

泣き声を出すのを我慢して、弘志は声を絞り出す。

膀胱に残ったおしっこが時折漏れ出して、ぴちゃぴちゃと水たまりの上に着る。

「おそうじをさぼってごめんなさい」

百回。終わった。

和美は胸をドキドキさせながら、こう言おうと決めていたことを言う。

「うん、じゃあ、おもらししてごめんなさいって 最後に言って？  
そしたら許してあげる」

弘志の顔が一瞬で耳まで赤くなった。

「おもらしをして、ごめんなさい」

「よしよし、我慢できなかつたんだね。」

「・・・」

「あらら、泣いちゃった？」

和美の嬉しそうな声が部屋に響く。

「だいじょうぶ。赦してあげる。心配しないで。床のおしっこを全部拭いて、パンツ洗って、お風呂で私に体洗われるの。そしたら全部赦してあげる。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1979z/>

---

罰と赦し

2011年12月7日01時59分発行